

《史料研究》

大正～昭和初期の歴史教育参考用の和漢史事比較

—中山久四郎「和漢駢事（比事）」の考察—

鈴木 正弘

はじめに

明治後期に成立した東洋史の背景には、前近代以来の漢史の伝統がある。日本人が中国の歴史である漢史を学ぶ意義はどのような点にあったのだろうか。別稿で考察したように、明治初期に刊行された歌括体通史書では、和漢を比較的に理解しようとする潮流が存在する¹。こうした潮流は、近代的な装いを纏うその後の東洋史教育にも伏流しているようである。

筆者は、中山久四郎（1874-1961）の教授資料について考察を試みたことがある²。中山は、戦前の東洋史教育の主流を占める一人で、ドイツ留学で身につけたドイツ風の歴史学・歴史教育学と漢学に根ざす伝統的学風とが奇妙に入り交じった歴史観・歴史教育観を提示する。率直に言って中山の考えはよく解らなかつた。今日にいたっても、それほど理解が深まったとは思えない。そのなかでも『東洋歴史教授資料』（三省堂、1932）に付録された「和漢駢事（比事）二百八十二事項—東洋史と国史との類似対比の事実—」は違和感のあるもので、「歴史学的に考えれば不可解な感じを抱くのであるが、共感的理解を重視する中山の歴史教育観においては極めて有効なもの」とまとめるのが精一杯であった。ここでは、中山『大日本史講座 第17巻—支那史籍上の日本—』（雄山閣、1930）「第二十五章 和漢駢事（比事）二百八十八事項（国史と支那史との類似対比の事実）」（以下、基本的に『大日本史講座』と略称する）によりつつ検討を加えることとしよう。

I. 「和漢駢事（比事）」作成の経緯

「和漢駢事（比事）」は、『東洋史教授参考資料』（三省堂、1927）と『東洋歴史

1 拙稿「明治期学制公布以前における和漢混淆の歌括体通史教科書—白幡義篤撰『和漢帝王歌』の考察—」（『アジア教育史学の開拓』東洋書院、2012）

2 拙稿「旧制中等学校『東洋史』の教授資料・教師用参考書（一）—昭和十年前、主要三『東洋史』教授資料の基礎的考察—」（『異文化交流』32、1999）の「Ⅲ、中山久四郎『東洋史教授参考資料』『東洋歴史教授資料』の考察」参照。

教授資料』（三省堂、1932）の内、前者には附されず、後者に附されている。『大日本史講座』は、「和漢駢事（比事）」作成の経緯を、

此表の初作は、大正六年六月にありて、比較の事例一百二十項を算へしが、「歴史と地理」第一卷第六号（大正七年四月発行）に掲載しては、十五項を増加し、其後第二次の増訂に際し、更に百四十七項を加へて、二百八十二項となし、今次第三回の増訂に六項を加へて、総計二百八十八項とした者である。（『大日本史講座』、274 頁）

と述べる。つまり、

	年月	増加	総計	掲載
初 作	大正 6 年（1917） 6 月		120 項	
第一次増訂	大正 7 年（1918） 4 月	15 項	135 項	『歴史と地理』 1-6 掲載
第二次増訂	※昭和 2 年（1927） 以後	147 項	282 項	『東洋歴史教授資料』（三省堂、1932）掲載
第三次増訂	※昭和 5 年（1930） 10 月	6 項	288 項	『大日本史講座』掲載

となる。この内、『大日本史講座』は、昭和 5 年（1930）10 月初版。一方『東洋歴史教授資料』は、昭和 7 年（1932）刊本であるが、初版の刊年を記しておらず、「和漢駢事（比事）」を掲載しない『東洋史教授参考資料』が昭和 2 年（1927）刊本であるから、昭和 2 年から 5 年にかけて第二次増訂をし、微調整の第三次増訂をしたことになる。

中山は、大正 6 年（1917）に 43 歳、昭和 7 年（1932）に 58 歳である。つまり中山の壮年期の仕事の一つとしてよいであろう。

Ⅱ. 「和漢駢事（比事）」における類似対比の対象

「和漢駢事（比事）」における対比の対象は、論題からいえば、和漢の事跡、歴史であるから和史と漢史ということになる。よく見ると『東洋歴史教授資料』（昭和 7 年刊本）付録の副題は「東洋史と国史との類似対比の事実」（傍点筆者、以下同じ）で、対して『大日本史講座』の副題は、「国史と支那史との類似対比の事実」である。『大日本史講座』が「支那史籍上の日本史」という書名であり、単に平仄を合わせたものともみえる。しかし、改めて「東洋史と国史」と「国史と支那史」という違いの

意味を考えておくこととしよう。『大日本史講座』は、

此表は、著者の専攻の点よりいへば、東洋史の為に作りたるものなれども、国史の参考資料とすべき点なきにしもあらざるべし。若し是によりて、古人の言行、時代の形勢、国は和漢を異にし、地は東西を隔つと雖ども、史上類似の事実、殆んど一揆に出づるものあることを知り、東洋史の教授に当り、国史の人物、時勢の類似異同せるものを挙げて、以て生徒の瞭解を助け、読史の趣味を催さしめんと欲せらるゝ諸君の参考資料となることを得ば、記者の幸福なり。尚ほ本表に関して大方諸君の批評示教に接することを得ば、豈にひとり記者の幸のみならんや。／中亜印度方面の東洋史と国史と、東洋史と西洋史との比較に至りては、請ふ之を後日にゆづらん。（『大日本史講座』、273～274 頁）

と述べる。ここで中山は、「支那史」の語を用いず、「東洋史」の語を用いて、「国史」「西洋史」と対比している。本来的に「東洋史の為に作りたるもの」で、あくまでも「東洋史」教育の専門家としての営為から作成されたものといえる。しかし「中亜印度方面」の東洋史を別にすると言うことは、実態としては「支那史」ということになる。したがって、『大日本史講座』の主旨から、「国史と支那史」となったと解すことができよう。「東洋史」の立場に立つ著作に「支那史」や「漢史」が伏流していることに注目すべきであろう。

Ⅲ. 「和漢駢事（比事）」作成の主旨

中山の「和漢駢事（比事）」作成の主旨はどのようなものだろうか。『大日本史講座』の記述より検討しよう。中山はまず、

此表は古来の国史と東洋史とにあらはれたる名君賢相偉人英雄忠臣烈女の言行の相類似せるもの、又は其異同の相対比すべきもの、并に和漢の時勢の相似たるものを採択して、両々相比較したるものである。（『大日本史講座』、273 頁）

と述べる。特に「和漢の時勢の相似たるものを採択して、両々相比較」という。また、

…（略）…若し是によりて、古人の言行、時代の形勢、国は和漢を異にし、地は東西を隔つと雖ども、史上類似の事実、殆んど一揆に出づるものあることを知り、東洋史の教授に当り、国史の人物、時勢の類似異同せるものを挙げて、以て生徒の瞭解を助け、読史の趣味を催さしめんと欲せらるゝ諸君の参考資料となること

を得ば、記者の幸福なり。（『大日本史講座』、273 頁）

と述べる。「東洋史」は人気教科、わかりやすい教科というわけではない。どちらかといえば、困難な科目として語られている。そこで日本史との類似の事項を梃子にして、授業を構築し、生徒の興味関心を喚起しようとする試みとも見える。たとえば「五、禹王の卑宮 仁徳天皇の皇居御倭約」という項目ならば、「相比較し、共通点とともに相違点を述べよ」という問題が出てくる。実際に似ているかどうかは二の次で、ともかく並べて考えさせるための教材集といえなくもない。

国史にとっての意義は那边にあるか。

元来歴史には、内部研究と外部研究との二あり。内部の研究、本国の研究、固より重んずべきものなれども、之と同時に、外部の研究、外国よりの側面的觀察、又は内外古今の比較対照は、内部又は本国の研究の補助としても、大に注意すべきものである。（『大日本史講座』、273 頁）

やや取って付けたように感じるが、「内部又は本国の研究の補助」という意義を付与している。実は国史と東洋史とはまったく異なる教科ではない。『大日本史講座』は、その点を強く自覚した書で、中山は、「第一章 緒言及び参考書目」において、

同じく外国といつても、近西の支那と遠西の西洋とは、その我国に対する歴史的関係は、大に相異して居る。我が日本と支那とは、近く一葦帶水を隔てゝ、東西相對立し、上古より早く既に往来交通して、彼の国の制度、礼樂、學術、宗教、詩文、行事より、衣服、飲食、工芸、技術、風俗、趣味等に至るまで、苟も我国体人情に抵触しない者は、採択して、我国運の發達を輔け、我文物の進歩を助けしめた。これは我國民の虚懷求益といはうか、広採他善といはうか、また採長補短といはうか、將たまた先進模倣の爲めといはうか、兎に角我国と支那との交通の関係影響は、實に多方面に亘り、広く且つ深いものである。／されば日支又は和漢交通の歴史を明にして、我国文物の由来を研究するは、我国歴史家の爲すべき責務の主なるものゝ一つである。（『大日本史講座』、1～2 頁。下線は筆者による。）

と述べる。ここでは、「日支又は和漢」といい、「我が日本と支那とは、近く一葦帶水を隔てゝ、東西相對立」するという。国史の理解には、東洋ではなく、支那・漢との交通史・交流史の重要性を主張するものということができる。

IV. 「和漢駢事（比事）」の参考文献

中山は「附録参考書の五六種」として次の諸書を挙げる。

○和漢軍談		林羅山編
○和漢両鏡録	貞享三年（1686）刊	山本洞雲編
○和漢十八孝子		大槻磐溪著
○和漢孝子蒙求	明治四年（1871）刊	加藤神陰著
○和漢人物一雙伝	嘉永三年（1850）刊	虞淵方外史著
○東西蒙求	明治十七年（1884）刊	山賀新太郎／辻元篤次郎 同著
（『大日本史講座』、300 頁）		

今これらを詳述することはできない。ただ和漢比較、和漢を関連づけて理解しようとする潮流は、江戸時代から明治前半にかけて連綿と続いていることを確認できる。ここでは明治前半の著作二点を確認できる。しかしこれだけでなく、林羅山『和漢軍談』は、明治 16 年（1883）に内外兵事新聞局より刊行されている。また江戸前期の著作である山本洞雲『和漢両鏡録』について、日本古典籍総合目録データベースによれば、東大総合図書館に、「和漢両鏡」と称す明治期の写本があるとする³。また大槻磐溪（1801-1878）『和漢十八孝子』については、中山も刊年を記しておらず不明な点がある。さらに日本古典籍総合目録データベース等にも本書名はみえない。ただし日本古典籍総合目録データベースによれば、大槻磐溪『皇朝十八孝伝』という関連を推測させる書が明治 5 年（1872）に刊行されていることを知ることができる。

やや注意を要するのは『和漢人物一雙伝』である。日本古典籍総合目録データベースによれば、本書は「和漢駢事の改題本」であり、東洋大哲学堂等に所蔵されているという。本書は虞淵方外史（超然）の『和漢駢事』天保 6 年（1835）刊本の改訂というのである。つまり中山の「和漢駢事」という書名は、本書に由来することになる。中山は江戸時代以来の和漢比較論の延長線上に自身の「和漢駢事（比事）」を位置付けようとしたものということができよう。

V. 和漢対比の概観

前掲の虞淵方外史編『和漢駢事』については、別稿を企図している。虞淵方外史は江戸時代後期の近江在住の浄土真宗の高僧である。別掲の項目表〔表 1〕ならびに〔表 2〕によって形式を比較すると、虞淵方外史書は項目別、対して中山書は、中国の時

3 なお「【版】大橋，中山久四郎」とある。【版】は「出版に関する注記」であり、中山久四郎が関わるのであろうか。この点調査を要す。

代によって区分している。また虞淵方外史書は和事に対して漢事を対応させる。対して中山書は、漢事に対して和事を対応させる。つまり、中山書は、中国史に登場する人物・事績を時代順に展開し、役立つように日本人あるいは事績を対応させようとするものである。項目数並びに、第7までの180項に対するパーセントを掲げると、

- 第1 先秦時代 (1-37 37 項 20.6%)
- 第2 秦漢三国時代 (38-113 76 項 42.2%)
- 第3 両晋南北朝 (114-123 10 項 5.6%)
- 第4 隋唐時代 (123-138 16 項 8.9%) ※123 は二つ有り、合計は 289 項となる。
- 第5 五代及び宋金元時代 (139-168 30 項 16.7%)
- 第6 明清時代 (169-174 6 項 3.3%)
- 第7 通史及び雑事 (175-179 5 項 2.8%)
- 第8 通史追加諸条 (180-288 109 項) ※203 以下は年齢の対比。

となる。先秦～秦漢三国で約六割を占め、古い時代に重点を置いている。対比の概要をうかがうために、冒頭九項を掲げると、

第一、先秦時代	
一、伏羲氏の結繩	琉球の藁算
二、神農の医薬	少産名命の療病
三、黄帝帝堯治年の久	孝安垂仁両天皇在位の長
四、禹治水の間家門を過ぐれども入らず	本能寺の変後秀吉東帰姫路城を過ぎ士卒の入城を禁令す
五、禹王の卑宮	仁徳天皇の皇居御倭約
六、盤庚の遷都	桓武天皇の御遷都
七、殷の尚質	北条氏の尚質用武
八、殷の高宗夢に傳説を得	神功皇后夢に神教を受けて三韓を征す
九、同上	後醍醐天皇夢に楠正成を得

となる。人物の事跡を中心とするが、「七」のように王朝の類似も見られる。全体に見ると、たとえば「一六、伊尹 藤原伊尹」「一七、伊尹周公 藤原伊周」「一八七、司馬相如 藤原相如」というように、名前の類似、連想されるものまでを取り、また何歳まで生きたかを対比するなど、好事家的色彩も有す。史実にこだわることなく、太平記や講談など、当時の人たちの教養に即した興味深い人物を取り上げているのも特徴である。稀に解説を附すものもある。「二七、周 足利氏」には「初めの天下の

取り方、終りの天下の失ひ方、相類似す」とある。恐らく解説がなければ、理解できないであろう。続いて「二八、春秋戦国 足利氏」では簡単な略図を附して、「主権の勢力の順次下に移ること相似たり」とある。なお、どのような共通点を有すものか判然としないもの、もっと類似した人物のいるように感じられる組み合わせのものもある。たとえば「韋応物—小野小町」。韋応物の詩をよく知っているならば納得がいくことかもしれない。ただ小野小町ならば、魚玄機あたりではないだろうか。

おわりに

漢史は、『十八史略』等史略体書の講読を基礎とする前近代的学习法に裏打ちされていた。また支那史も漢史の延長線上に、国史体の通史叙述を目指した。東洋史は、世界史体を採用し、西洋史と共に「世界史の一半」を占める教科となった。しかし一面では、国史と密接に関わる教科として認識され、国史と密接に関わる領域は、支那史・漢史の領域と認識されていたのである。

改めて、『和漢駢事』を受容した中山久四郎の思考について見ると、「史癖は佳癖である」と記していたことを思い出した⁴。歴史を学ぶ営みにどのような意義があるのか。歴史を学ぶこと、歴史に学ぶことを「癖」とするならば、和漢史事比較のような「瑣事」こそ楽しい。中山は、近代的な歴史学の手法を学んだ漢学者とでも言うべき人物であり、日本人の中国史の楽しみ方の一端を東洋史の教育者達に伝えようとしたと解することができるのではないだろうか。

学校において「国史」と「東洋史」は近接した科目であった。文部省による教員検定試験である「文検」においては、日本史と東洋史とをセットで設定している⁵。つまり東洋史を担当する教員は、国史の教員としての資格も有していたことになる。中山は、大正11年(1922)から昭和15年(1940)にかけて文検委員であり⁶、そうした事情を熟知する立場にあった。東洋史の授業には日本漢学の伝統があり、そうした伝統の延長線上に中山の「和漢駢事(比事)」は位置付くものということになろう。

なお、内容を精査し検討することはできなかった。試みに作成した〔表1〕「中山久四郎編『和漢駢事』一覧」〔表2〕「虞淵方外史編『和漢駢事』一覧」を掲げ、参考に供したい。

4 中山久四郎『歴史及歴史教育』（共立社書店、1925）「序文」冒頭。

5 拙稿「『文検』歴史科について—概要と足跡—」（『比較文化史研究』1、1999）参照。

6 拙稿「『文検』歴史科の出題者・試験官—『官報』任命記事による推定と考察—」（『総合歴史教育』37、2001）参照。

〔表1〕 中山久四郎編『和漢駢事』一覧

通番	内番	漢	和	【原注】ならびに備考
第一 先秦時代				
1	1-1	伏羲氏の結繩	琉球の藁算	【伏羲（ふくぎ）】三皇の一人。繩の発明者。【結繩】【藁算】インカで言うキープ。紐に結び目を付けて数を記述する。
2	1-2	神農の医薬	少彦名命の療病	【神農】炎帝ともいう。三皇の一人。医療と農耕を教えたとする。【少彦名 命（すくなびこなのみこと）】日本神話における神。国造りの協力神、医薬・酒造などの力を持つ。
3	1-3	治年の久	孝安垂仁 両天皇在 位の長	【孝安天皇】第一一代天皇。在位一〇二年。一三七歳あるいは一二三歳という。【垂仁（すいにん）天皇】第六代天皇。在位九九年。一四〇歳、一五三歳、一三九歳など諸説ある。
4	1-4	禹治水の間家門を 過ぐれども入らず	本能寺の変後〔豊臣〕 秀吉東帰姫路城を過 ぎ士卒の入城を禁令 す	【禹】夏朝の創始者。【豊臣秀吉】羽柴秀吉。安土桃山の関白、太閤。
5	1-5	禹王の卑宮	仁徳天皇 の皇居御 倭約	【禹】→〔4〕【仁徳天皇】第一六代天皇。
6	1-6	盤庚の遷都	桓武天皇 の御遷都	【盤庚】殷第一九代の王。殷墟へ遷都する。【桓武天皇】第五〇代天皇。長岡京、平安京へと遷都する。
7	1-7	殷の尚質	北条氏の尚質用武	
8	1-8	殷の高宗夢に傳説 を得	神功皇后 夢に神教 を受けて 三韓を征 す	【高宗（殷）】武丁のこと。殷の賢君、夢にみた隠者傳説を得て中興に導く。【傳説（ふ えつ）】傳巖中に壊れた道を修築しているところを見いだされる。【神功皇后（じんぐうこうごう）】第一四代仲哀天皇の皇后。仲哀天皇急死に際して、熊襲を討ち、三韓を討つ。
9	1-9	同上〔殷 の高宗夢 に傳説を 得〕	後醍醐天 皇夢に楠 正成を得 指擲すべ し	【後醍醐天皇】第九六代天皇。南朝の初代天皇。建武の新政実施。【楠木正成（まさしげ）】後醍醐天皇を助け、建武の新政を推進。湊川の戦いで足利尊氏の軍に敗れて自害。
10	1-10	呉の泰伯 の避讓	〔菟道〕 稚郎子皇 子の辞退	【泰（太）伯】春秋呉の始祖。讓国の賢王子。周王の長子に生まれ、第三子に讓位するために国を出て、長江下流に赴く。【〔菟道〕稚郎子（うじのわきいらつこ）】記紀にみえる皇族。仁徳に皇位を譲るべく自殺したとする。
11	1-11	伯夷叔齊 の清節	水戸義公 〔徳川光 圀〕の伯 夷思慕	【伯夷・叔齊】殷末期の隠者。孤竹国の王子の兄弟。周の武王の殷の紂王討伐を諫め、周の支配を認めず、餓死する。【徳川光圀（みつくに）】水戸藩の第二代藩主。諡号は「義公」。儒学を奨励し、水戸学の基礎をつくる。
12	1-12	周の呂望 の輔佐	武内宿禰 の元老	【呂望（りょぼう）】太公望呂尚のこと。周の軍師、齊の始祖となる。殷を牧野の戦いで破る。【武内宿禰（たけうちのみくね）】五天皇に仕えた記紀にみえる忠臣。
13	1-13	武王、呂 望を尚び て尚父と 號す	孝謙天皇 惠美押勝を 称して尚舅 といふ尚舅 の称蓋し尚 父に倣ひて 義少しく異 なり	【武王】、周の創始者。文王の子。殷を滅ぼし、周を立てる。【呂望】→〔12〕【孝謙天皇】、第四六代・第四八代天皇（女帝）。重祚時は称徳天皇。【惠美押勝（えみ の おしかつ）】藤原仲麻呂。

14	1-14	武王の伐桀	〔明智〕 光秀の周 山	【武王の伐桀】「武王の伐紂」の誤か。桀は夏最後の王。紂は殷最後の王。【光秀の周山】周山城は明智光秀の築城。光秀は自らを周の武王になぞらえて周山と称した。
15	1-15	周公の制禮	聖徳太子 の摂政	【周公】周公旦（たん）。周建国の功臣。武王ならびに成王を補佐し、魯の基盤を造る。周の儀式・儀礼書『周礼』、『儀礼』を著したとされる。【聖徳太子】推古天皇のもと、政治を行う。
16	1-16	伊尹	藤原伊尹	【伊尹（い いん）】殷初、湯以後三代の名宰相。【藤原伊尹（これただ/これまさ）】平安中期の公卿。摂政・太政大臣。
17	1-17	伊尹周公	藤原伊周	【周公】→〔15〕【藤原伊周（これちか）】平安中期の公卿。道長との抗争に敗れ、失意の内に没す。
18	1-18	周厲王の衛巫	平清盛の 京童	【厲王（れいおう）】周、暴政を行い、腐敗を極める。衛巫（えいふ）という人物に批判を取り締まらせたが、国人暴動が起こり、厲王は鎬京を脱出する。その結果、共和となる。【平清盛の京童（きょうわらわべ）】京童（口やかましい京の若者達）は、平清盛を「高平太」（高下駄を履いた平家の若造）と呼んでいたという。
19	1-19	晋文公の困難	源頼朝の 逆境	【文公（晋）】春秋五霸の一人。国内の混乱で長期にわたる亡命生活を強いられる。即位後、軍政改革と人材登用によって、国勢を強化する。→【城濮の戦】〔20〕【源頼朝（よりとも）】鎌倉幕府の初代の征夷大將軍。少年時は伊豆国へ配流されていた。
20	1-20	城濮の戦	関原の役	【原注】一戦して天下に覇たる所相似たり【城濮の戦】春秋五大戦の一つ。楚を中心とする連合による宋攻撃に対して、晋の文公は、連合を組織して対抗し勝利。晋の覇権を確立する。
21	1-21	晋楚邲の戦 晋の下軍舟を争ふ 舟中の指掬すべし	一谷の敗 平軍舟を争ふ 断臂舟に満つと称す	【邲（ひつ）の戦】晋楚の激戦。楚軍勝利。覇権は晋から楚へと移る。【一ノ谷の戦】源平合戦の一つの戦い。源氏方は、鴨越で二手に分かれ、義経らが裏手の断崖絶壁を駆け下り、平氏方を奇襲した。
22	1-22	晋の解楊	鳥居強右衛門 勝高（ママ）	【解楊】春秋、晋の大夫。楚の宋を囲むに際して、宋に使いして、楚側に捕らえられ、宋への帰順を説くよう強要されるも、真実を説く。【鳥居強右衛門（すねえもん）勝商（かつあき）】、戦国の足軽。奥平家の家臣。長篠の戦いで、敵方に捉えられ、死を覚悟し、動静を伝える。
23	1-23	養由基の射術	源為朝の 弓勢	【養由基（よう ゆうき）】春秋、楚の大夫。射術において「百発百中」の名手。【源為朝（ためとも）】鎮西八郎と称す。源頼朝、義経の叔父。巨体で気性が荒く、剛弓の使い手。
24	1-24	越王勾践及び范蠡	児島高德の 桜樹の句	【勾践（こうせん）】、春秋後期の越王。范蠡の補佐によって呉を滅ぼす。【范蠡（はん れい）】越王勾践の忠臣。富国強兵を図る。異国で商才を示す。伝説であろう。【児島高德（たかのり）】南朝方の武将。『太平記』の登場人物で、実在には疑念あり。後醍醐天皇奪還を目指す、強固な警備に断念。桜の木に勾践と范蠡の故事を用いて、忠臣の現れることを記した。

25	1-25	晋の豫讓	上総五郎兵衛忠光	【豫讓（よ じょう）】戦国、晋の人。漆を塗り病気を偽り、墨を飲んで喉を潰し、主君の仇を討とうとした。【上総五郎兵衛忠光（かずさごろうひょうえ ただみつ）】藤原忠光。壇ノ浦の敗戦後行方をくらまし、源頼朝の命をねらうが失敗する。
26	1-26	豫讓は待遇により忠君の厚薄あり	寺坂平右衛門は微禄なるも忠君の念極めて厚し	【豫讓】→ [25]。ここでは、はじめに仕えた君主に尊重されず、去ったことをいうか。【寺坂平右衛門（てらさか へいえもん）】または寺坂吉右衛門（きちえもん）。赤穂浪士の中でただ一人足輕の身分で討ち入りに加わり、切腹を免れ、天寿をまっとうする。
27	1-27	周	足利氏	【原注】初めの天下の取り方、終りの天下の失ひ方、相類似す
28	1-28	春秋戦国	足利氏	【原注】主一臣一陪臣一陪々臣／権力／主権の勢力の順次下に移ること相似たり
29	1-29	齊の田単の火牛	源義仲の火牛	【田単】戦国、齊の人。齊は燕の楽毅（がく き）の攻撃により二城を残すのみとなる。楽毅と燕王の離間を策し、火牛の策によって、城を回復した。【源義仲（よしなか）】木曾義仲。信濃源氏の武将。以仁王の令旨によって挙兵、入京するも治安維持に失敗する。
30	1-30	齊の孟嘗君鶏鳴者を用ふ	楠正成泣男を用ふ	【孟嘗君】田文（でん ぶん）。戦国の諸侯。戦国四君の一人。秦から脱出する際に鳥の物まねをする人物を使って、関所を抜けた故事あり。【楠木正成】→ [9] 泣き男を登用して難を逃れた故事有り。
31	1-31	秦の遠交近攻	織田信長の遠交近攻	【織田信長（のぶなが）】安土桃山の天下人。室町幕府を滅ぼしながら明智光秀の反乱に際して自害する。
32	1-32	荊軻	上総五郎兵衛忠光	【荊軻（けい か）】秦王政（後の始皇帝）の暗殺を目指す燕の刺客。失敗する。【上総五郎兵衛忠光】→ [25]
33	1-33	齊の田横五百の義士	楠正成七百の死士	【田横】漢、齊王の弟。兄の虜となるに、齊王と称して五百名の部下と共に、海島による。帝に召されて、洛陽に向かうも、臣従することを拒否して自害、五百名の部下も自死した。【楠木正成】→ [9]
34	1-34	荊軻と白虹貫日	信西の白虹貫日	【荊軻】→ [32] 【信西】平安後期の僧。俗名藤原通憲。保元の乱の立役者の一人。平治の乱に自害。
35	1-35	書経と詩経	日本書紀と萬葉集	
36	1-36	論語と加藤清正及び前田利家	【加藤清正（きよまさ）】安土桃山から江戸時代初期にかけての武将、大名。豊臣秀吉の子飼いから関ヶ原は東軍。肥後熊本藩初代藩主。晩年『論語』を読み込んだという。【前田利家（としいえ）】戦国大名。加賀前田藩の祖。豊臣五大老の一人。晩年は漢籍なども学んだ。	
37	1-37	孫子と源義家及び武田信玄	【孫子】孫武。春秋の兵家。『孫子』の作者。【源義家（よしいえ）】八幡太郎（はちまんとろう）として知られる。平安後期の武将。後三年の役を起こす。白河法皇の意向で院昇殿を許された。源義家は、大江匡房より『孫子』を学び、孫子の「鳥の飛び立つところに伏兵がいる」という教えにより伏兵を察知し、敵を破った話として知られている。【武田信玄】武田晴信（はるのぶ）。戦国の武将。甲斐の大名。	

第二 秦漢三国時代				
38	2-1	秦朝	源氏	【原注】和漢二国の歴史の時代の間に一大区隔を画して別に一天地を開く如きこと相似たり
39	2-2	秦始皇の坑儒	平清盛の謗言圧伏	【始皇帝】中国統一を成し遂げ、最初の皇帝となる。【平清盛】伊勢平氏の棟梁。平治の乱に勝利し、武士初の太政大臣。
40	2-3	秦皇五大夫の松	笠置の松	【五大夫（ごたいふ）の松】松の異名。始皇帝泰山封禪の帰路、雨宿りした松を五大夫に封じたことによる。なお五大夫は秦爵。【笠置の松】後醍醐天皇が笠置山の行在で夢に「楠」の暗示を見たとする。
41	2-4	同上〔秦皇五大夫の松〕	仁明天皇山城の大内山に狩したまひ承和十四年〔847〕五位に叙す	【仁明（にんみょう）天皇】平安初期、第五四代天皇。双丘寺（後の五位山法金剛院）の内山に登り、景勝を愛で叙す。
42	2-5	同上〔秦皇五大夫の松〕	延喜年中の五位鷺	【五位鷺（ごいさぎ）】『平家物語』に見える。
43	2-6	徐福の求薬	田道間守の求橘	【徐福】秦の方士。不死の薬を求めて東方に出航したとされる。【田道間守（たじまもり）】記紀に伝わる垂仁天皇により橘を求めに常世国に派遣された人物。
44	2-7	秦の始皇	平清盛	【始皇帝】→〔39〕【平清盛】→〔39〕
45	2-8	扶蘇	〔平〕重盛	【扶蘇（ふそ）】始皇帝の長子。将来を嘱望された。始皇帝の死後、胡亥が後継となり、偽詔にしたがって自死。【平重盛（しげもり）】清盛の嫡男。有力な外戚はなく、孤立気味であり、清盛に先立ち没す。
46	2-9	胡亥	〔平〕宗盛	【胡亥】秦、二世皇帝。始皇帝の末子。始皇帝の死後、李斯・趙高らに擁立されて即位。「馬鹿」の故事で知られる。反乱の激化の中で、趙高のクーデターで殺害される。【平宗盛（むねもり）】清盛の三男。清盛の後継者で、平氏滅亡。自身も斬首される。
47	2-10	陳勝	源頼政	【陳勝】秦末の反乱指導者。劉邦や項羽に先んじて反乱を起こした。【源頼政（よりまさ）】平氏政権下で中央政界に留まり、平清盛からも信頼され、従三位に昇る。しかし以仁王と結んで挙兵を計画。宇治平等院の戦いに敗れ自害した。
48	2-11	楚の三戸滅秦	源氏の三孤平氏を滅す	【楚の三戸】戦国楚。昭・屈・景をいう。【源氏の三孤】不明。三孤は、狐の白毛の衣を着るほどの重臣・高官のこと。
49	2-12	楚の項羽の勇	源義仲の勇	【項羽】項籍。羽は字。秦末の楚の武将。秦を滅ぼし、「西楚霸王」と号す。劉邦と争い、敗死する。【源義仲】→〔29〕
50	2-13	項羽の破秦	新田義貞の鎌倉入	【項羽】→〔49〕【新田義貞（よしさだ）】南北朝の武将。鎌倉幕府を滅ぼし、建武新政を樹立した立役者。足利尊氏の対抗し、湊川での合戦で敗北。
51	2-14	漢高祖の大智	源頼朝の大智	【高祖（漢）】漢の建国者劉邦のこと。【源頼朝】→〔19〕
52	2-15	呂后	〔北条〕政子	【呂后】呂雉（りょ ち）漢の高祖劉邦の皇后。恵帝の母。高祖没後専横化する。【北条政子（まさこ）】源頼朝の正室。頼朝没後、実権を握り、尼將軍と呼ばれる。
53	2-16	虞姫	巴御前	【虞姫（ぐき）】虞美人。項羽の妻。【巴御前（ともえござ）】

				ん)】木曾義仲の妾。強弓の女武者。史実としては疑念有り。
54	2-17	韓信の戦略と末路	源義経の戦略と末路	【韓信】劉邦を補佐した三傑の一人。貧家の出で苦心し、「股くぐり」などの逸話がある。漢では王となるが、結局滅ぼされる。【源義経（よしつね）】頼朝の異母弟。幼名を牛若丸。対平氏戦の最大の功労者。頼朝の追討により自刃。
55	2-18	項羽の賞賜惜愛	秀吉の分金二回	【原注】此二事は反対の比較なり【項羽】→〔49〕【豊臣秀吉】→〔4〕
56	2-19	黄石公の三略と北条早雲		【黄石公（こうせきこう）】秦の隠士。張良に一書を与え、王者の師となることを予見する。この書は、兵法書で『黄石公三略』という。【北条早雲（そううん）】伊勢宗瑞（そうずい）。一説に伊勢長氏。戦国大名の嚆矢。後北条氏の祖。
57	2-20	漢高祖	足利尊氏	【高祖（漢）】→〔51〕【足利尊氏】室町幕府の初代征夷大將軍。
58	2-21	同〔漢高祖〕	豊臣秀吉	【豊臣秀吉】→〔4〕
59	2-22	同〔漢高祖〕	徳川家康	【徳川家康】江戸幕府の初代征夷大將軍。
60	2-23	高祖と豊沛出身の功臣		徳川氏の譜第(ママ)衆 【高祖（漢）】→〔51〕
61	2-24	蕭何（張良）	大江広元	【蕭何】前漢、高祖の功臣。【張良】前漢、高祖の功臣。黄石公に書をうけ、建国に尽力する。【大江広元】源頼朝の側近。鎌倉幕府政所初代別当。
62	2-25	高祖と韓信英布等	徳川氏の外様大名	【高祖（漢）】→〔51〕【韓信】→〔54〕【英布（えいふ）】秦末、漢初の武将。若い時黥刑（いれずみ）されたので黥布（けいふ）ともいう。群盗から、項羽の旗下で、頭角を現しながら、楚漢の争いを傍観。漢では王となるが、高祖に討たれる。
63	2-26	樊噲	日本の樊噲（徳川忠直）	【樊噲（はん かい）】秦末～前漢初の武将。劉邦と同郷。義弟。鴻門の会の立役者。【徳川忠直（ただなお）】松平忠直。家光・光圀の従兄。大坂夏の陣の功労者。ただし論功行賞に不満を抱く。
64	2-27	韓信胯下に俛す	秀吉勝家の腰を按摩す	【韓信】→〔54〕【豊臣秀吉】→〔4〕【柴田勝家（かついえ）】戦国から安土桃山にかけての武将、大名。織田の重鎮。賤ヶ岳の戦いで秀吉に敗れる。
65	2-28	韓信の潜膀	木村重成の忽耐	【韓信】→〔54〕【木村重成】豊臣秀頼の家臣。大坂夏の陣で戦死。
66	2-29	韓信の漂母	早雲の寄食	【韓信】→〔54〕【北条早雲】→〔56〕
67	2-30	漢王拜韓信為大將〔漢王、韓信に拜して大將と為す〕	信長使秀吉鎮京都〔信長、秀吉を使わして京都に鎮せしむ〕	【原注】一軍皆驚。可見英雄際会和漢一轍。〔一軍皆驚く。英雄の際会、和漢一轍なるを見る可し。〕【韓信】→〔54〕【豊臣秀吉】→〔4〕
68	2-31	韓信の背水陣	柴田勝家の破甕	【韓信】→〔54〕【柴田勝家】→〔64〕
69	2-32	紀信	村上義光	【紀信】劉邦の功臣。劉邦に代わって項羽に下り、劉邦を救い、殺される。【村上義光（よしてる）】鎌倉末の武将。護良親王の忠臣。『太平記』に登場する。

70	2-33	同〔紀信〕	免（ママ） 受勝助	【毛受勝助】毛受勝照（めんじゅ かつてる）。勝助は通称。柴田勝家に仕え、しばしば勝家に代わって、切り込んだ。賤ヶ岳の戦いで、秀吉軍を引きつけ戦死。
71	2-34	紀信の黄 屋左纛	藤原師賢 の哀衣繡 裳	【紀信】→〔69〕【藤原師賢（もろかた）】花山院師賢。鎌倉後期の公卿・歌人。
72	2-35	王陵の母 漢に負か ず	常盤源氏 に負かず	【王陵】前漢初期の人。高祖同郷の友人で、恵帝の宰相となり、高祖のやり方に従い呂氏専権に反対した。【常盤（御前）（ときわごぜん）】平安末期、源義朝の側室。源義経の母。
73	2-36	文帝の露 台中止	仁徳天皇 の新宮御 延期	【文帝（前漢）】高祖の四男（庶子）。呂氏専横後の皇帝。【仁徳天皇】→〔5〕
74	2-37	相如古今	中書前後	藺相如と司馬相如／兼明親王と具平親王ともに中務卿たり 【藺相如（りん しょうじょ）】戦国末、趙の家臣。「完璧帰趙」「刎頸の交わり」で知られる名臣。【司馬相如】前漢武帝頃の文章家。藺相如に私淑する。【兼明親王（かねあきらしんのう）】平安中期の公卿、皇族。中務卿となったことから前中書王と呼ばれる。【具平親王（ともひら しんのう）】平安中期の皇族。中務卿となったことから後中書王と呼ばれる。
75	2-38	伏生	太安萬侶	【伏生】漢初の学者。秦の焚書で失われた『尚書』を蒐集し、朝錯に伝授する。【太安萬侶（おおのやすまろ）】『古事記』の編纂者。
76	2-39	同〔伏生〕	稗田阿礼	【原注】田能村竹田の咏史の歌にいふ「ふる事をたが後の世に伝ふべき稗田のとねりもの忘れせば」うつして以て漢の伏生の尚書暗記の事を咏する者とすべし【稗田阿礼（ひえだのあれ）】『帝紀』『旧辞』を誦習し、『古事記』に基礎史料を提供する。一説には女性とする。【田能村竹田（たのむら ちくでん）】江戸後期の南画家。各地を遊歴し、詩文も巧み。
77	2-40	賈誼	三善清行 の封事	【賈誼（か ぎ）】前漢文帝時の儒家的文官。『新書』を編む。【三善清行（きよゆき/きよつら）】平安中期の公卿、漢学者。醍醐天皇に意見封事十二箇条を提出する。
78	2-41	同上〔賈 誼〕	新井白石	【新井白石（はくせき）】江戸中期の政治家・朱子学者。正徳の治。
79	2-42	武帝の推 恩策	豊徳二氏の 封土分割	
80	2-43	衛青、霍 去病	源頼義、 〔源〕義 家	【衛青（えい せい）】前漢武帝時の大將軍。対匈奴戦に活躍。【霍去病（かく きょへい）】前漢武帝時の票騎將軍。衛青の姉の子。対匈奴に衛青をしのぐ武功有り。早世する。【源頼義（よりよし）】平安中期の武士。河内源氏第二代棟梁。【源義家】頼義の子。→〔37〕
81	2-44	漢の受降 城	多賀城	【漢の受降城】「受降」は、降伏者を受け入れること。漢の受降城は、甘肅省張掖の西北、陰山山脈付近とのこと。【多賀城】大和朝廷の対蝦夷の軍事的拠点。後、陸奥国府や鎮守府が置かれる。
82	2-45	霍光の廃 立	昭宣公基 経の行事	【霍光（かく こう）】霍去病の弟。武帝期に台頭。塩鉄会議の賢良文学を後援する。宣帝擁立の中心人物で大將軍

				となり、内朝の中心人物となる。【昭宣公基経（もつつね）】藤原基経。平安前期の公卿。阿衡の紛議。初の関白に就任。
83	2-46	王昭君嫁胡〔王昭君、胡に嫁す〕	喜遊〔藤原〕守義〔喜びて遊ぶ〔藤原〕守義〕	【王昭君（おうしょうくん）】前漢、朝命で匈奴の呼韓邪単于（こかんやぜんう）に嫁した宮女。【藤原守義（もりよし）】平安中期の公卿。六国の守を歴任。長命で晩年公卿となる。
84	2-47	朱雲従龍逢比干〔朱雲、龍に従い比干に逢う〕	路豊永従伯夷遊〔路豊永、伯夷の遊に従う〕	【比干（ひかん）】殷の三仁の一人。紂の諸父。紂を諫め、三日さらず、紂に殺される。【朱雲】漢、皇帝に佞臣を斬ることを奏上、激怒した帝は御史に下すが、欄干に張り付いて壊し、上述の言を言い放った。【路豊永（みちのとよなが）】道鏡の師。和氣清麻呂に対し、道鏡の即位を容認しない意思をつたえた人物。
85	2-48	前漢の孔光	大江広元	【孔光】前漢後期の官僚。孔子の子孫で儒家としての筋を通し、人望あり、数帝に用いられた。ただし王莽の台頭を止めることはできなかった。【大江広元】→〔61〕
86	2-49	王莽	平将門	【王莽】前漢の元帝の外戚から新を建国。短期政権に終わる。【平将門（まさかど）】平安中期の関東の豪族。反乱の中心人物。「新皇」を自称するも藤原秀郷、平貞盛らにより討伐される。
87	2-50	王莽の時群雄漢を称す	伊勢長氏北条氏を冒す	【王莽】→〔87〕【伊勢長氏（ながうじ）】北条早雲のこと。→〔56〕
88	2-51	後漢の光武帝	北条氏康	【原注】川越の役、昆陽の役ともに寡を以て衆を撃ちて奇勝を得たり【光武帝（後漢）】後漢初代皇帝。倭の遣使。【北条氏康（うじやす）】後北条氏第三代当主。外交、内政に手腕を発揮。
89	2-52	光武〔帝〕の初志（執金吾）	頼朝の初念（伊豆）	【光武帝（後漢）】→〔88〕青年時代は華やかな執金吾の服装にあこがれていた。【源頼朝】→〔19〕
90	2-53	伏波銅柱（馬援）	アトイヤ	【伏波銅柱】馬援が越南征伐に際して立てたもの。【馬援（ば えん）】伏波将軍。後漢初の人。対外戦に成果を上げた。【アトイヤ】国後島の北端。安政年間、仙台藩士によって「大日本地名アトイヤ」と記す標柱が立てられた。
91	2-54	同上〔伏波銅柱（馬援）〕	樺太の日露国境標	【樺太の日露国境標】日本は、ポーツマス条約で樺太の北緯五〇度以南を領有することとなり、一定間隔で建てた。
92	2-55	明帝	欽明天皇	【原注】仏教伝来につきて
93	2-56	楚王英	聖徳太子	【楚王英】劉英。後漢光武帝の三男。明帝の異母兄。黄老・浮屠を尚んだ。【聖徳太子】→〔15〕
94	2-57	同上〔楚王英〕	蘇我稲目	【原注】初期の崇仏につき【蘇我稲目（いなめ）】馬子の父。仏教の公伝を受けて崇仏を主張。物部氏争う。
95	2-58	後漢和帝の鄧后	仁明天皇后橘氏の女学	【鄧后】後漢、和帝の皇后で、帝没後、太后として臨朝。徳政を知られる。【仁明天皇后橘氏】檀林皇后、橘嘉智子。大学別曹学館院を設立。
96	2-59	（歴代の皇諡両漢の帝號に類似あり）		
97	2-60	諸葛孔明の醜婦	吉川元春の醜婦	【諸葛孔明（しょかつ こうめい）】諸葛亮。三国蜀漢の軍師・政治家。【吉川元春（きっかわ もとはる）】戦国～安土桃山期の武将。「毛利両川」の一人。吉川氏の家督を

				乗っ取る。正室新庄局は不美人であったというが、生涯側室を置かず子宝に恵まれ、夫婦円満であったという。
98	2-61	諸葛孔明	楠正成	【諸葛孔明】→〔97〕【楠木正成】→〔9〕
99	2-62	諸葛一門	楠氏一族	
100	2-63	魏の鄧艾の陰平の陰	源義経の鶴越坂落し	【鄧艾（とうがい）】三国魏の将軍。蜀漢平定の功労者。陰平を経由して蜀に入った。陰平は甘肅省。【源義経】→〔54〕鶴越（ひよどりごえ）坂落しは一ノ谷の戦いでのこと。
101	2-64	魏の荀彧	大江広元	【荀彧】曹操を補佐した。【大江広元】→〔61〕
102	2-65	曹操の許の都	清盛の福原の都	【曹操】三国魏の基礎を作る。【平清盛】→〔39〕
103	2-66	曹操の疑冢七十二の不安	〔武田〕信玄の一棺湖の安	【曹操】→〔102〕【武田信玄】→〔37〕
104	2-67	曹操	〔源〕頼朝	【原注】兄弟を失ひ宗族を亡す【曹操】→〔102〕【源頼朝】→〔19〕
105	2-68	王陵、趙苞	三浦義澄	【王陵】→〔72〕【趙苞（ちょうほう）】後漢の人。鮮卑の入寇に際して、母と妻を捕らえられる。それでも進撃して鮮卑を撃破。しかし母と妻は殺される。【三浦義澄（よしずみ）】鎌倉初の御家人。頼朝の宿老の一人。
106	2-69	趙苞、徐庶	明智光秀の母	【趙苞】→〔105〕【徐庶（じょしょ）】三国蜀の人。劉備に仕えるが、曹操が母を捕まえると、諸葛亮を薦めて、自身は曹操旗下へ。母は、庶の行為を見て自縊した。【明智光秀の母】軍記物では、光秀が老母を敵方へ人質に差し出す話があるとのこと。史実は不明。
107	2-70	関羽の春秋	清正の論語	【関羽】三国蜀漢の劉備に仕え活躍、壮絶な戦死を遂げる。【加藤清正】→〔36〕
108	2-71	関羽射臂	景政射眼〔景政、眼を射らる〕	【関羽】→〔107〕【鎌倉景政（かげまさ）】平安後期の武将。後三年の役に従軍し、右目を射られながらも奮闘した。歌舞伎にもなっている。
109	2-72	関帝廟	清正公	【関帝廟】関羽→〔107〕を祀る廟。武廟。【清正公（せいしょうこう）】加藤清正→〔36〕を祀って所願成就を願う。
110	2-73	孫策、孫権	北条氏長、氏康	【孫策、孫権】後漢末～三国。兄弟。【北条氏長（うじなが）】江戸前期の幕臣、旗本・兵法学者。【北条氏康】→〔87〕
111	2-74	孫堅 孫策 孫皓 孫権	〔毛利〕元就 元春 輝元 隆景	
112	2-75	司馬懿	北条時政	【司馬懿（しばい）】魏の功臣。大権を握り、西晋の礎を築く。【北条時政（ときまさ）】伊豆の在地豪族。源頼朝の正室・北条政子の父。鎌倉幕府初代執権。
113	2-76	羊祜送薬〔羊祜、薬を送る〕	謙信送塩〔謙信、塩を送る〕	【羊祜（ようこ）】西晋の人。呉の陸抗と対峙し、呉人を招撫する。【上杉謙信（けんしん）】上杉輝虎（てるとら）、戦国越後国の戦国大名。武田信玄との川中島の戦いは有名。
第三 両晋南北朝時代				
114	3-1	石勒	筒井順典（ママ）	【石勒】五胡十六国後趙の創建者。羯。【筒井順典】筒井順昭（じゅんしょう）のことか。
115	3-2	石勒論古史〔石勒、	北条早雲聴兵書〔北	【石勒】→〔114〕【北条早雲】→〔5

		古史を論ず]	条早雲、兵書を聴く]	[6]
116	3-3	石勒と光武帝	秀吉と頼朝	【石勒と光武帝】石勒は、過去の人評において「光武帝と互いに中原の鹿を追いたい」とする。【秀吉と頼朝】秀吉は、鶴岡八幡宮において、頼朝を「天下友達」と称す。
117	3-4	八公山の草木皆兵	富士川の水禽皆兵	【八公山】苻堅南攻の際のこと。【富士川の戦い】源平合戦。平氏側は水鳥の大群が一斉に飛び立つ羽音大混乱に陥った。
118	3-5	謝安の謝玄推薦	板倉勝重の宗重推薦	【謝安の謝玄推薦】東晋。謝玄は、謝安の甥。【謝安】→[191]【板倉勝重の宗重推薦】宗重（むねしげ）は勝重の長男。【板倉勝重】→[194]
119	3-6	昭明太子	聖徳太子	【昭明太子】蕭統。南朝梁、武帝の皇太子。国政に携わり、仁政を行った。文章家としても知られ『文選』を編む。【聖徳太子】→[15]
120	3-7	陶淵明	鴨長明	【陶淵明】陶潜。六朝前期の文学者。郷里の田園に隠遁。田園詩人。【鴨長明（かものちょうめい）】平安末から鎌倉初にかけての随筆家。『方丈記』の作者。
121	3-8	同〔陶淵明〕	石川丈山	【石川丈山（じょうざん）】安土桃山～江戸初期の武将、文人。徳川譜代であったが、大坂夏の陣後浪人となり、隠棲。漢詩・儒学・書道・茶道等に精通する。
122	3-9	淵明一句	冠里公発句	【陶淵明】→[122]【冠里公】安藤信友（のぶとも）。冠里（かんり）は俳号。江戸中期の大名。吉宗時の老中。
123	3-10	陶侃の運甓	織田の春米	【陶侃（とう かん）】晋の武将。広州に左遷されても朝夕百枚の甓（かわら）を運んで、復帰のために鍛錬した。【織田の春米】春米は米を臼でつくこと。「天下餅」の落首。
第四 隋唐時代				
123	4-1	隋煬帝の運河	清盛の兵庫港築営	【煬帝（ようだい）（隋）】隋第二代皇帝。高句麗遠征や大運河の開削などを行い、後年は政治を顧みず、反乱の中で殺害される。【平清盛】→[39]
124	4-2	秦始皇／漢皇（ママ）祖	豊臣秀吉／徳川家康	【始皇帝】→[39]【高祖（漢）】→[51]【豊臣秀吉】→[4]【徳川家康】→[59]
125	4-3	隋煬帝／唐の太宗	豊臣秀吉／徳川家康	【煬帝（隋）】→[123]【太宗（唐）】李世民のこと。建国に大きな役割を果たす。貞観の治で知られる。【豊臣秀吉】→[4]【徳川家康】→[59]
126	4-4	唐太宗十六才にして始畢可汗の囲を解く	武田信玄十六才にして海野口城を陥る	【太宗（唐）】→[126]【始畢可汗（シビルカガン）】東突厥の可汗。【武田信玄】→[37]
127	4-5	唐太宗虎牢の役	信玄戸石の戦	【太宗（唐）】→[126]【虎牢の役】李世民が竇建徳を捕虜とし、王世充を降伏させて大勢を決した戦い。【武田信玄】→[37]【戸石の戦】砥石崩れ（といしくずれ）ともいわれる。戸石城は村上義清の出城。武田軍は砥石城兵と村上軍本隊に挟撃され敗退する。
128	4-6	太宗	池田光政	【太宗（唐）】→[126]【池田光政（みつまさ）】江戸前期の大名。名君として知られる。岡山藩の基盤を造り、花鳥教場、閑谷学校を開く。
129	4-7	貞観政要／群書治要	帝範／臣軌 と本邦の聖君賢臣	
130	4-8	狄仁傑	吉備真備	【狄仁傑】唐、高宗・則天武后期の能臣。裁判に長じてい

				る。清代に『狄公案』あり。【吉備真備（まきび）】奈良の学者、公卿。遣唐留学生として入唐。学者から立身して大臣になる。
131	4-9	狄仁傑の破祠	烈公〔徳川齊昭〕の毀仏	【狄仁傑（てき じんけつ）】→〔130〕【徳川齊昭（なりあき）】烈公。水戸藩の第九代藩主。将軍・慶喜の父。藩政改革に尽力。あわせて仏教抑圧神道重視の政策を推進した。
132	4-10	張巡の籠城と最後の言	楠公の籠城と湊川最後の言	【張巡】唐、安史の乱に際して睢陽（すいよう）に籠城。敗れるも、戦況に大きな影響を与える。【楠木正成】→〔9〕
133	4-11	張巡許遠	正成 正季	【許遠】唐、張巡とともに安史の乱に際して睢陽（すいよう）に籠城。【楠木正成】→〔9〕【楠正季（まさすえ）】正成の弟。湊川の戦いで敗北。正成と共に自害。
134	4-12	唐の文学者と本邦歌人		
		① 李白—柿本人麿		【李白】盛唐の詩人。唐詩の最高峰の一人。【柿本人麿（かきもとのひとまる）】飛鳥の歌人。歌聖と称される。
		② 杜甫—紀貫之		【杜甫】盛唐の詩人。唐詩の最高峰の一人。【紀貫之（きのつらゆき）】平安前期の歌人。歌人の最高峰であるとともに『土佐日記』の選者。
		③ 白樂天—大伴黒主又は〔紀〕貫之		【白樂天】白居易のこと。中唐の詩人。【大伴黒主（くろぬし）】六歌仙の一人。平安の歌人。【紀貫之】→〔②〕
		④ 王維—在原業平		【王維】盛唐の詩人・画家。南宗画の祖と称される。【在原業平（ありわらのなりひら）】六歌仙の一人。平安初期の貴族・歌人。
		⑤ 王昌齡—僧正遍昭		【王昌齡】盛唐の詩人。【僧正遍昭（へんじょう）】六歌仙の一人。平安前期の僧・歌人。歌僧の先駆。桓武天皇の孫にあたる。
		⑥ 韋応物—小野小町		【韋応物】中唐の詩人。【小野小町（おののこまち）】六歌仙の一人。平安前期の女流歌人。
		⑦ 賈島—曾根好忠		【賈島】中唐の詩人。【曾根好忠】曾禰好忠（そねのよしただ）平安中期の歌人。
		⑧ 李義山—清少納言		【原注】（雑纂と枕の草紙）【李義山】李商隠のこと。【雑纂】『義山雑纂』のこと。清少納言『枕草子』に影響を与えた。
		⑨ 白樂天香炉峯雪の句と清少納言		【白樂天】→〔③〕。【香炉峯雪】『枕草子』第二百八十段。清少納言、ならびに当時の漢詩愛好の一端を知ることができる。
		⑩ 韓退之—〔在原〕業平		【原注】力餘りありて言の足らざる所、気骨ありて苦澁なる所相似たり 【韓退之】韓愈のこと。【在原業平】→〔④〕
		⑪ 白樂天—〔紀〕貫之		【原注】平易纖麗、易解易悦の点相似たり【白樂天】→〔③〕。【紀貫之】→〔②〕
		⑫ 杜甫—西行		【杜甫】→〔②〕【西行（さいぎょう）】鎌倉初期の僧侶・歌人。諸国を巡り、多くの和歌を残す。
135	4-13	郭子儀と李輔国尚父の號	押（ママ）美押勝尚舅の称	【郭子儀】安史の乱で大功を立て、功臣として権力を振るい、孫は憲宗の皇后となる。【李輔国】唐、肅宗朝の権勢を振るう宦官。【押（ママ）美押勝】恵美押勝の誤。→〔13〕

136	4-14	三師三公三省六部等の官制	太政大臣左右大臣八省等の官制	
137	4-15	太常寺	神祇官	【太常寺】九寺の一つ。天子の宗廟祭祀を司る。古い時代ほど重要であった。【神祇官】二官の一つ。祭祀を司る。
138	4-16	段秀実	蒲生秀実	【段秀実（だん しゅうじつ）】唐中期の武将。安史の乱に対し功績あげ、その後もよく軍を管理した。徳宗に疎まれたが反旗を翻した朱泚に付くふりをして付かず、殺害された。【蒲生秀実（ひでさと）】江戸後期の尊王論者。
第五 五代及び宋金元時代				
139	5-1	唐の李克用 に宮人陳氏	新田義貞 と宮人藤原氏	【李克用】五代・後唐の太祖。【宮人陳氏】皇太妃陳氏は李克用の正妻。男勝りで武術に優れる。【新田義貞】→〔50〕【宮人藤原氏】勾当内侍（こうとうないし）のこと。史実としては疑念があるようである。
140	5-2	李克用一目眇号独眼竜〔李克用、一目眇（すがめ）して独眼竜と号す〕	伊達政宗	【李克用】→〔139〕【伊達政宗（まさむね）】出羽・陸奥の戦国大名。仙台藩初代藩主。隻眼で独眼竜と呼ばれる。
141	5-3	後唐の荘宗の劉夫人	武田信玄と夫人諏訪氏	【荘宗（そうそう）（後唐）】李存勖（り そんきょく）。五代後唐の初代皇帝。【劉夫人】貧しい出身から皇后に上り詰めるが、私財の蓄積に努め、亡国に導く。【武田信玄】→〔37〕【諏訪氏】側室。諏訪御料人。
142	5-4	後周の世宗の毀仏鑄銭	松平信綱の毀仏鑄銭	【世宗（後周）】柴榮（さい えい）。後周二代皇帝。三武一宗の法難の最後のもので、経済的理由による。【松平信綱（のぶつな）】江戸前期の大名。老中となり「知恵伊豆」と呼ばれる。
143	5-5	馮道	上杉憲実	【馮道（ひょう どう）】五代後唐以後、五朝八姓十一君に仕える。【上杉憲実（のりざね）】室町中期の守護大名。関東管領。足利学校や金沢文庫を再興した。
144	5-6	同〔馮道〕	大江広元	【大江広元】→〔61〕
145	5-7	宋の太祖	徳川家康	【原注】孤児寡婦の天下を取りし所相似たり【太祖（宋）】趙匡胤。宋の建国者。後周の武将から他の将兵の推戴を受けて即位する。【徳川家康】→〔59〕
146	5-8	趙普の論語	藤原在衡	【趙普（ちょう ふ）】宋の太祖趙匡胤の重臣、宰相。太宗にも信任される。太祖に勧められて読書好きとなり、特に『論語』によって、太祖・太宗を助けたと自負する。【藤原在衡（ありひら）】平安中期の公卿。長命で大臣に昇進。逸話が多く『古事談』に「藤原在衡、儒業 格勤の事」条がある。
147	5-9	同上〔趙普の論語〕	〔藤原〕惺窩の大学	【藤原惺窩（ふじわら せいか）】江戸前期の儒者。近世儒学の祖。林羅山らを輩出する。著書の中に『大学要略』がある。
148	5-10	狄青の投銭	秀吉の投銭	【狄青（てき せい）】北宋第一の名将。【豊臣秀吉】→〔4〕
149	5-11	狄青の春秋左伝勉強	源義家の孫子勉強	【狄青】→〔148〕【源義家】→〔37〕
150	5-12	司馬光の幼時破甕	柴田勝家の籠城破甕	【司馬光（しば こう）】北宋の儒者、歴史家、政治家。旧法党の領袖。『資治通鑑』の編者。子どもの頃から沈着冷静で、他の子どもが水甕に落ちた時に甕を割って助けた。

				「瓶割り温公」と呼ばれた。【柴田勝家】→〔64〕
151	5-13	程伊川の 大学中庸 表章	清原宣賢 の〔大〕 学〔中〕 庸二書表 章	【程伊川】程頤（てい い）。北宋の儒者。【清原宣賢（のぶかた）】室町の公卿・学者。国学者・儒学者で屈指の碩学とされる。
152	5-14	徽宗	足利義政	【徽宗（きそう）】北宋第八代皇帝。芸術面に優れる。靖康の変で金に捕らわれる。【足利義政（よしまさ）】室町第八代将軍。政治を疎んじ、文化人として東山文化を築いた。
153	5-15	王安石	新井白石	【王安石（おう あんせき）】北宋の政治家・詩人・文章家。新法党の領袖。【新井白石】→〔78〕
154	5-16	同〔王安石〕	太宰春台	【太宰春台（しゅんだい）】、江戸中期の儒者・経世家。
155	5-17	岳飛の黒 装	井伊の赤 装	【岳飛】南宋の武将。金に対抗するが秦檜に謀殺される。【井伊】井伊直政は、武田の赤備えを吸収し、自隊を赤備（ぞな）えとして編成した。小牧・長久手の戦いで先鋒を務める。
156	5-18	蒙古と南 宋	源氏と平 氏	
157	5-19	賈似道	足利義満	【原注】自邸に就いて公文書を呈署せる驕僭の点相似たり【賈似道（か じどう）】南宋末の軍人、政治家。【足利義満（よしみつ）】室町第3代将軍。幕府権力確立。北山文化を現出。対明朝貢貿易を行う。
158	5-20	南宋厓山 の末路	平氏 壇 浦 の滅亡	【厓山】南宋滅亡す。【壇浦】平氏滅亡す。
159	5-21	文天祥臨 刑南向再 拝而死〔文天祥、 刑に臨みて南向再 拝して死す〕	楠正成北向再 拝而死〔楠正 成、北向再拝 して死す〕	【文天祥（ぶん てんしょう）】南宋末の宰相。南宋滅亡後、元に屈せず、大都において刑死するに先立ち、獄中で「正気の歌」を作る。【楠木正成】→〔9〕
160	5-22	文天祥正 気 歌	〔藤田〕東 湖、〔吉 田〕松蔭、 月形洗藏 武夫の正 気歌	【正気歌（せいきのうた）】文天祥の作。忠君愛国の思想の極地ともいうべき作。【藤田東湖】江戸後期の水戸藩士、水戸学藤田派の学者。安政の大地震に遭い死去。【吉田松蔭】江戸後期の長州藩士、思想家、教育者。松下村塾で、思想的影響を与えた。安政の大獄に連座し斬首される。【月形洗藏】幕末の福岡藩士。薩長同盟の起草文を考案し、幹旋に尽力した。佐幕派の復権により斬首される。【廣瀬武夫】海軍軍人。日露戦争で活躍し、戦死。「軍神」として神格化された。
161	5-23	朱子	清原頼業	【原注】中庸表出の点相似たり【朱子】南宋の儒者。朱子学の祖。四書として『礼記』から『大学』『中庸』を独立させた。【清原頼業（よりなり）】平安末の儒学者。朱子に先立って、『礼記』から『大学』を抄出して別格扱いとしたとする説がある。
162	5-24	唐と宋	元禄時代と寛政時代	
163	5-25	胡澹庵の 上高宗封 事	北條氏斬蒙古使〔北 条氏蒙古の使を斬る〕	【胡澹庵】胡銓（こせん）。南宋の政治家。宰相秦檜（しんかい）と対立した対金主戦論者。
164	5-26	史天沢染 白髪〔史	齋藤実盛 の白髪染	【史天沢】元の漢人世侯。宰相となる。高齢で南宋討伐の総司令となり、陣中で病没する。【齋藤実盛（さねもり）】

		天沢、白髪を染む]		源平合戦の武将。覚悟の上で髪を染め、木曾義仲に討ち取られる。『平家物語』で有名。
165	5-27	金主亮の詩	源実朝の歌	【原注】立馬呉山第一峰／箱根山わがこへ来れば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ 【金主亮】完顔亮。金第四代皇帝。文武の才能を有したが、南宋攻略に失敗。殺害される。死語海陵王に落とされる。【源実朝（さねとも）】鎌倉第三代征夷大將軍。歌人として優れていたが、若くして暗殺される。
166	5-28	金主亮の地図	秀吉坐右の地図	【金主亮】→ [165] 【豊臣秀吉】→ [4]
167	5-29	唐宋金三朝の詩人	菊池五山	【原注】唐の白香山、李義山、宋の王半山、曾茶山、金の元遺山の號によりて五山と號す
168	5-30	宋の許尹の評詩	紀淑望の論歌	【許尹】孝宗の時、敷文閣待制。評詩のことは不明。【紀淑望（よしもち）】平安中期の歌人。『古今和歌集』の真名序を指すか。
第六 明清時代				
169	6-1	明の太祖と漢高祖	秀吉と頼朝	【太祖（明）】洪武帝、朱元璋（しゅ げんしょう）。明の建国者。【高祖（漢）】→ [51] 【豊臣秀吉】→ [4] 【源頼朝】→ [19]
170	6-2	漢明の二祖	足利氏	【原注】本を弱くして末を強くしたる弊に陥る所相似たり 【漢明の二祖】漢の高祖劉邦→ [51] と明の高祖朱元璋→ [169] のこと。
171	6-3	明の成祖と僧道衍（姚広孝）	家康と天海僧正	【成祖（明）】三代皇帝永楽帝のこと。【僧道衍（どうえん）（姚広孝）】明初、永楽帝の軍師。靖難の変の第一の功臣。【徳川家康】→ [59] 【天海】天台宗の僧。徳川家康の側近として、政策に深く関与した。
172	6-4	同上〔明の成祖と僧道衍（姚広孝）〕	秀吉と恵瓊	【豊臣秀吉】→ [4] 【恵瓊（えけい）】戦国・安土桃山頃の臨済宗僧侶。武将および外交僧。毛利側近から秀吉側近となる。
173	6-5	靖難の役	伊達騒動	【原注】明太祖 懿文太子—建文帝／燕王（成祖永楽帝）伊達政宗 忠宗—綱宗／宗勝 【靖難の役】洪武帝の子燕王朱棣（永楽帝）が乱を起こし、甥の建文帝から帝位を奪った事件。【伊達騒動】江戸前期に伊達氏仙台藩で起こったお家騒動。
174	6-6	清の呉三桂 陳円円の事に激して去就を決す	藤原広嗣 妻の事に激す	【呉三桂（ご さんけい）】明末清初の武将。明側の対清防衛の前線にいたが、李自成の乱に対して山海関を開き、清軍を招き入れた。後に雲南に勢力を扶植。三藩の乱を起こす。【陳円円】明末・清初の美妓。武将呉三桂の側室。呉三桂に山海関を開かせることになった傾国の美女。史実は不明な点が多いようである。【藤原広嗣（ひろつぐ）】奈良の貴族。式家・宇合の長男。太宰府に流され、反乱を起こす。
第七 通史及び雑事				
175	7-1	賢聖障子にうつされたる支那の聖賢		【賢聖障子（げんじょうのしょうじ）】内裏紫宸殿の母屋と北廂とのさかいに立てられている襖。三十二人が描かれている。
176	7-2	周、漢初、唐	足利氏、豊臣氏	
177	7-3	秦、魏、晋、隋、	平氏、源氏、織田氏	※この条の後に頼山陽の「團扇説」「守

		宋、元、明		「産解」を掲げる。ここでは省略する。
178	7-4	節	節刀	【原注】節は鬣牛を以て之を飾る。我国刀剣を以て之に代ふ、故に節刀といふ。
179	7-5	武昌望夫石	肥前松浦石	【武昌望夫石】貞女が戦地に赴く夫を見送りそのまま石になった。【肥前松浦石】松浦佐用姫（まつら さよひめ）は、新羅に出征する恋人と別れがたく石になった。
第八 通史追加諸條				
180	8-1	蚩尤の冢	平将門の冢	【蚩尤（しゅう）】神話に登場する神。黄帝と涿鹿（たくろく）の野に戦い、敗れる遺体は二ヶ所に分けて葬られ、ひとつを蚩尤冢という。【平将門の冢】平将門の首を祀っているという塚。→ [86]
181	8-2	夏の寒促（ママ）の纂弑	三好実休	【寒促（かんさく）】夏の重臣でありながら后羿を殺害して王となる。【三好実休（じっきゅう）】戦国の武将。主君細川持隆を殺害する。
182	8-3	嗚呼有呉延陵季子之墓	嗚呼忠臣楠子之墓	【季子（きし）】季札（きさつ）。春秋末、呉で活躍した清廉賢哲の士。王位を拒み、延陵の封じられ、諸国への使者としても活躍した。【嗚呼忠臣楠子之墓】徳川光圀が楠正成を顕彰して建てたもの。神戸市の湊川神社境内にある。【楠正成】→ [9] 【徳川光圀】→ [11]
183	8-4	屈原の楚辞	〔北畠〕親房卿の神皇正統記	【屈原（くつ げん）】戦国楚の政治家、詩人。王を諫めたが受け入れられず、入水自殺する。詩人として高名。【北畠親房（ちかふさ）】南北朝の公卿。該書で南朝の正統性を述べる。
184	8-5	項羽と虞氏	〔源〕義仲と松殿（基房公）の姫上	【項羽】→ [49] 【虞氏】→ [55] 【源義仲】→ [29] 【松殿基房公（まつどの もとふさ）】藤原基房。平安末～鎌倉前期の公卿。娘を義仲の正室とし、権力の維持を図ろうとするが義仲の死によって失脚。有職故実に通じる。
185	8-6	曹参	三善康信	【曹参（そう しん）】、前漢初の武将、政治家。劉邦の同郷で、戦功をあげる。蕭何の後任の相国。蕭何の作った体制を墨守した。【三善康信（やすのぶ）】鎌倉初期の公家。伊豆の頼朝に、京都の情勢を知らせるなどし、初代問注所執事となる。
186	8-7	諸呂（呂氏一族）	北条時政、義時	【諸呂（呂氏一族）】→漢の呂后の一族。【呂后】→ [52] 【北条時政】→ [112] 【北条義時（よしとき）】鎌倉幕府第二代執権。政子の弟。得宗家当主。源氏将軍が途絶えた後、実権掌握。承久の乱では、朝廷を制圧し、三上皇を配流した。
187	8-8	司馬相如	藤原相如	【司馬相如】→ [74] 【藤原相如】（すけゆき）】平安時代中期の貴族、歌人。
188	8-9	袁紹	平重盛	【袁紹】後漢末の武将。名門出身。董卓に敗れ、盛り返すも、官渡の戦いで曹操に敗れる。【平重盛】→ [45]
189	8-10	石勒と王衍	将門と貞盛	【石勒】→ [114] 【王衍（おう えん）】西晋の政治家。西晋に清談の風を流行らせ、亡国の一因をなす。石勒に殺される。【平将門】→ [86] 【平貞盛（さだもり）】平安時代中期の武将。将門従兄弟。将門を討ち取る。
190	8-11	苻堅と王猛	足利義満と〔細川〕頼之	【苻堅】五胡十六国、前秦の皇帝。華北を統一するも淝水の戦いで東晋に大敗する。【王猛】前秦の苻堅に仕えた宰相。華北統一に貢献した。【足利義満】→ [157] 【細川頼之】幼少の足利義満を輔佐する。

191	8-12	謝安の囲碁	北条義時の囲碁	【謝安】東晋の政治家。淝水の戦いで前秦の苻堅を破る。戦中は落ち着いて客と囲碁を打った。【北条義時（よしとき）】→〔186〕囲碁の話は、和田合戦の時のこと。
192	8-13	独孤信と周隋の后妃	藤原道長の貴盛	【独孤信（どっこ しん）】西魏の武将。娘は北周・隋の皇后、唐の太祖の母等。【藤原道長（みちなが）】平安中期の公卿。三天皇の外祖父として、摂関政の黄金期を現出する。
193	8-14	隋煬帝	足利義政	【煬帝（隋）】→〔125〕【足利義政】→〔152〕
194	8-15	狄仁傑の内擧	板倉勝重	【狄仁傑】→〔130〕【板倉勝重】江戸時代初期の名奉行。『板倉政要』で知られる。
195	8-16	安祿山	明智光秀	【安祿山】唐、玄宗に仕えるソグド系の武人で、安史の乱を起こす。【明智光秀（みつひで）】織田信長に取り立てられるが、本能寺の変を起こす。
196	8-17	唐の韓幹の画馬	巨勢金岡	【韓幹】唐、玄宗朝の宮廷画家。馬図を得意とする。【巨勢金岡（こせのかなおか）】平安前期の宮廷画家。大和絵の様式を確立した。
197	8-18	唐の賈耽の地理	伊能忠敬又は長久保玄珠	【賈耽】唐後期の地理学者。【伊能忠敬（ただたか）】江戸中期の測量家。【長久保玄珠（げんじゅ）】一名赤水（せきすい）。江戸中期の地理学者。
198	8-19	五代十国の南唐の元宗後主の焚書	松永久秀の碎器	【元宗（南唐）】第二代国主李璟（り けい）。【後主（南唐）】第三代国主李煜（り いく）。焚書のこと不明。【松永久秀（ひさひで）】戦国の武将。松永弾正。複雑な歩みの後、信長に反逆して敗れて自殺。茶人として高名で、名器を叩き割って自害したとする説がある。
199	8-20	宋の太祖の太后	源頼朝	【宋の太祖の太后】昭憲杜太后。【源頼朝】→〔19〕北条政子→〔52〕。
200	8-21	元の太祖の祖先アラン媛の束矢の教訓	毛利元就の矢誠	【アラン媛】アラン=ゴア。チンギス=ハンの遠祖。五人の子に五本の矢を束ねて折らせて、力を合わせることの重要性を説いた。【毛利元就（もとなり）】安芸の戦国大名。三本の矢の教えで知られる。
201	8-22	元の韓林児と劉基	平将門と〔藤原〕秀郷	【韓林児】元末の群雄。韓山童の子。【劉基】元末明初の学者。洪武帝に信任される。【平将門】→〔86〕【藤原秀郷（ひでさと）】平安時代中期の武将。平将門追討の功により昇進。武家の棟梁となる。俵藤太（たわらのとうた）の百足退治など脚色される。
202	8-23	清兵の蟹螯陣	蝴蝶陣	【蟹螯陣】蟹螯はかにのはさみのこと。【蝴蝶陣】倭寇の首領が陣羽織を着て馬に跨がり、扇を手にして全軍を指揮した様子を喩える。

附記：中山久四郎『大日本史講座 第17巻―支那史籍上の日本―』（雄山閣、1930）より作成。なお漢字表記は、可能な範囲で常用漢字に改めている。

〔表2〕 虞淵方外史編『和漢駢事』一覽

通番	内番	和人物（事項）	漢人物（事項）	漢籍の典拠（〔 〕は和書）
徳行一 孝友・仁恵・清廉之類				
1	1	高倉帝	唐太宗	『貞觀政要』唐、吳兢撰。
2	2	橘良基	劉玄明	『世説（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
3	3	相応和尚	熊執易	『（唐）撫言』五代、王定保撰。
4	4	永観律師	趙孝	『世説（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
5	5	山田古嗣	王褒	『（三国志）魏志』
6	6	明慧上人	圭峯禪師	『唐書』李訓伝
7	7	伊藤長胤	阮長之	『世説（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
8	8	片山徽猷	朱百年	『世説（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
気節二 忠烈・貞淑・剛毅之類				
9	1	楠廷尉	張睢陽	『唐書』本（張睢陽）伝
10	2	勾当内侍	魏国夫人	『（資治）通鑑』宋、司馬光撰。
11	3	斉藤実盛	史天澤	『輟耕録』元末明初、陶宗儀撰。
12	4	楠正行	王陵	『唐書』本（王陵）伝
13	5	小山田高家	王超	『契丹國志』宋、葉隆禮撰。
14	6	縣守	趙真人	『搜神記』東晋、干宝撰。
15	7	平手政秀	史魚	『（孔子）家語』
16	8	形名妻	李侃婦	『智囊』明、憑夢龍撰。
17	9	烈女有智：（細川氏ノ夫人＝明智光秀ノ女）	（崔簡ノ妻鄭氏）	『智囊』明、憑夢龍撰。
器識三 偉度・先見・操守之類				
18	1	藤原行成	狄青	『（韓）忠獻遺事』宋、強至撰。
19	2	平貞盛	王衍	『晋書』
20	3	源光	程顥	『冬夜箋記』清、王崇簡撰。
21	4	中院内府	向敏中	『文海披沙』明、謝肇淛撰。
22	5	太閤	馬殷	『三楚新録』宋、周羽冲撰。
23	6	大関夕安	何棟	『明史』
24	7	森蘭丸	晏殊	『自警編』宋、趙善璵撰。
25	8	北条氏康	潘濬	『読書鏡』明、陳繼儒撰。
26	9	藤原秀卿	劉基	『野記』明、祝允明撰。
経務四 政績・計画・治生之類				
27	1	昭宣公	霍光	『漢書』
28	2	得地法：武田信玄		『荀子』十三、二十一
29	3	野中兼山	石曼卿	『孫公談圃』宋、孫升撰。
30	4	長玄珠	賈耽	『盧氏雜説』唐、盧言撰。
31	5	高陽親王	竇乂	『太平広記』宋
文雅五 学殖・詞藻・情性之類				
32	1	紀貫之女	処士其	『東谷贅言』明、敖英撰。
33	2	菅丞相（菅原道真）	韓魏公（韓琦）	『事文類聚前集』宋、祝穆編、元、富大用編。
34	3	釈証真	范仲淹	『自警編』宋、趙善璵撰。
35	4	源清	劉攽	
36	5	武將詩：貞山藤公	沈慶之／曹景宗	『芸苑卮言』明、王世貞撰。／『事文類聚別集』宋、祝穆編、元、富大用編。／『事文類聚別集』宋、祝穆編、元、富大用編。

37	6	袁世好尚：上杉安房守 憲実	李嵩	『文海披沙』明、謝肇淛撰。
38	7	源俊賴	趙抃	『丹鉛總錄』
39	8	僧琳賢	沙門道研	『世說（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
40	9	紀長谷雄	白居易	『幽閒（閑）鼓吹』唐、張固撰。
41	10	近衛	謝道韞	『晋書』
42	11	橘直幹	駱賓王	『唐書』
43	12	祇王	翺風	『拾遺記』前秦、王嘉撰（梁、蕭綺錄）
44	13	詩誦同趣：川北自然齋	（蘇）東坡	〔『閑田二筆』云〕『珊瑚（鈎）詩話』 宋、張表臣 撰
45	14	又（詩誦同趣）：沖石ノ 讃岐ノ伏柴ノ加賀ノ待 宵ノ小侍従	袁景文ノ祁文友	
兵機六 籌略・武案・勇敢之類				
46	1	足利直義	粘罕	『契丹國志』宋、葉隆禮撰。
47	2	明智光秀	安祿山	『唐書』本伝
48	3	不戦：吉川元春	韋孝寬	『百將伝』宋、張預撰。
49	4	秀吉	黃炳	『群談採余』明、倪綰撰。
50	5	原田伊豫	張遼	『（三国志）魏志』
51	6	搞不意：（薩摩の対琉 球）	（朱雋の対黃巾）	『智囊』明、憑夢龍撰。
52	7	胡蝶軍	撒星陣（張威）	（『武備志』）『智囊』明、憑夢龍撰。 ／『嘉定屠城紀略』
巧芸七 書画・工匠・殊能之類				
53	1	弘法大師	盧弘宣	『盧氏雜說』唐、盧言撰。
54	2	巨勢金岡	韓幹	『西陽雜俎』唐、段成式撰。
55	3	百濟川成	戴文進	『五雜俎』明、謝肇淛撰。
56	4	徹書記	蒲元	『世說（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
57	5	泥井公忠	苻朗	『晋書』
58	6	千利休	蔡邕	『世說（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
59	7	佐田某	柴紹弟	『朝野僉載』唐、張鷟撰。
60	8	北村祐菴	荀勗	『世說（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
靈奇八 異迹・徴応・神怪之類				
61	1	投鉞（空海師）	飛錫（寶誌和尚）	『因経』
62	2	（小野）頼風妻	何文女	『靈鬼志』唐、常沂撰。
63	3	蛛絲		（『源平盛衰記』石山条）『行宮雜録』 宋、趙葵撰。
64	4	鳩異		（『（源平）盛衰記』）『琅琊代醉（編）』 明、張鼎思撰。『（清）三朝実録採要』
65	5	平信長	慕容熙	『晋書』載記
66	6	鳥語不祥		『大金国志』
67	7	源廷尉	馬燧	『唐書』本伝
68	8	物化		『異苑』劉宋、劉敬叔撰。『西陽雜俎』 唐、段成式撰。
智数九 敏悟・応卒・権奇之類				
69	1	藤有国	高鳳	『群談採餘』明、倪綰撰。
70	2	曾呂利	蒙陀	『智囊』明、憑夢龍撰。
71	3	大塔宮	范睢	『史記』漢、司馬遷撰。
72	4	隆景侍士	楊脩	『世說（新語）』南朝宋、劉義慶撰。

73	5	驚栖玄光	吳郡卒	『世說（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
74	6	里婦捷智		『玉堂閑話』唐。
75	7	誑惑法師	朱古民	『智囊』明、憑夢龍撰。
模類十				
76	1	大津皇子	孫蕒	（『懷風藻』）『石倉詩選』明、曹学佺撰。
77	2	履中帝	鄭伯有	『左伝』襄十三年
78	3	承保帝	漢文帝	『史記』漢、司馬遷撰。
79	4	足利義政	隋煬帝	『北史』
80	5	婦人累夫		（『拾遺集』）『文献通考』三一・九四裔考、
81	6	藤隆光	崔協 ※力→刀	『五代史』任圜伝
82	7	藤雅材	王尼	『世說（新語）』南朝宋、劉義慶撰。
83	8	北条高時	衛懿公	『郁離子』元、劉基撰。『呂氏春秋』
84	9	江濃両国	閩浙分界	『聯珠詩格』元、于濟・蔡正孫輯。
85	10	二冢		『琅琊代醉』（明、張鼎思撰）所引『皇覧』
86	11	積塊		『朝野僉載』唐、張鷟撰。
87	12	鳥驚		『通鑑』注
88	13	三等		『皇明紀略』明、皇甫錄撰。
89	14	僧受俗官		
90	15	平治	初平	『（三国志）魏志』袁紹伝裴注所引『英雄記』
91	16	瑠璃聖	武風子	『虞初新志』清、黃承編。
92	17	三好実休	寒泥	『（歷朝）紀政綱目』明、黃洪憲撰。
93	18	壇浦	厓山	

附記：底本は、早稲田大学図書館蔵本（<http://www.wul.waseda.ac.jp>）を用いている。なお漢字表記は、可能な範囲で常用漢字に改めている。